川村学園女子大学研究紀要　第 29 巻　第 3 号　133 頁 – 149 頁　2018 年

空間前置詞 *On* の基本義の意味拡張に関する考察

田　中　　実*

Study on the Meaning Extension of Spatial Preposition *On*

Minoru TANAKA

要　　旨

英語空間前置詞 on は，その他の前置詞と同様多義語である。本研究は，その具体的用法の基本義の要素を確認し，それがどのように意味拡張をしているのかを考察した。基本義の最重要意味要素は「接触」「支持」のペアであったが，「接触」の方がより重要であった。また，「上に」の意味要素は基本義用法の中のプロトタイプ用法として指摘した。基本義との比較的明白な関係を示す中間的意味拡張の用法は数多くあったが，周辺的拡張はわずかであった。基本義と中間的拡張との関係はさまざまで，複雑なところも示していた。複数ある中間的用法の間で，基本義との拡張の程度の差を判断することは困難であることがわかった。

具体的用法の on の多義の構造は，わずかな例外を除いて基本義とその中間的拡張語義という比較的単純なものであった。家族的類似性を示すような多義の構造は見られなかった。これは，Lakoff（1987）などの主張する複数意味説を反証するものであった。

キーワード：英語空間前置詞 on，認知言語学，認知意味論，基本義，意味拡張

1．序論（研究の目的）

本研究の目的は，前置詞 on を取り上げて，その具体的（空間的）用法の調査を行い，その基本語義からの意味拡張を考察，分析を行うことである。

前置詞の具体的用法，つまり空間詞としての用法は，具体的であるだけにわかりやすいものと思われるかもしれない。だが，実際のその使用例はその基本的用法と考えられるものから極めて遠いもの，さらにはその関連性を見出すの難しいものまである。また，用法間の関係も極

*教授　英語学・英語教育

めて複雑である。

前置詞の用法の研究は数多くあるが，その意味拡張の程度に焦点を当てたものはほとんどない。Lee（2001）が前置詞 in の具体的意味拡張の程度を整理して述べているが，十分なものではない。なお，田中（2016）で in の具体的意味拡張の程度をもっと詳細に整理して論じた[1]。

前置詞 on の具体的用法については，その Lee（2009）においても 5 つの例を挙げて述べているにすぎない。On の意味拡張のほんの一部だけを述べている。そこで，本稿では on の具体的意味拡張に焦点をあてて，その拡張の全体像，拡張の程度，周辺的・例外的用法にはどのようなものがあるかなどを考察していく。

前置詞 on の用例，意味分類には，すでの多くの研究書，参考書・辞書があり，それらを資料として使用した。参考にした研究書としては，Bennett（1975），Hawkins（1984），Herskovits（1986，1988），Sandra and Rice（1995），Lee（2001），Goddard（2002），Taylor（2002），Evans（2009），辞書・参考書では，『E ゲイト英和辞典』（以下，『E ゲイト』），『ウィズダム英和辞典　第 3 版』（以下，『ウィズダム』），『ジーニアス英和辞典　第 5 版』（以下，『ジーニアス』），『プログレッシブ英和中辞典　第 5 版』（以下，『プログレッシブ』），『リーダーズ英和辞典　第 3 版』（以下，『リーダーズ』），『小学館ランダムハウス英和大辞典　第 2 版』（以下，『ランダムハウス』），Collins Cobuild Advanced Learner's Dictionary 8th Edition（以下 COBUILD 8），Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English 9th Ed.（以下 OALD 9），Longman Dictionary of Contemporary English 5th Ed.（以下 LDOCE 5），『わかるから使えるへ　表現英文法』（田中茂範著）（以下，『表現英文法』），『「なぜ」がわかる動詞＋前置詞』（中川右也・土屋知洋著）（以下，『「なぜ」がわかる』）である。

2. On の基本義

2.1　語彙の多義の捉え方

語彙の多義をどう捉えるかは，もちろん前置詞に限ったことではない。だが，ここでは本論の目的に照らして，前置詞を中心にして多義をこれまでどのように捉えてきたかを見ておきたい。前置詞の意味の多義性について大きく三つの立場に分けることができる。一つは，成分分析（componential analysis）による意味抽出である。これは，単一意味説である。前置詞の意味を意義素（意味成分）locative，source，path，goal，surface，interior などに分解し，それぞれの前置詞をそれらの意義素から組み立てる。各前置詞に中核的意味が存在すると捉え，さまざまな（つまりは，すべての）用法，用例に共通する意味を意義素で表し，それを中核的意

味とする。この立場をとる代表は，Bennett（1975）である。Bennett（1975）の分析によると，on の中核的意味は‘locative surface’として表される。もっともこれは，具体的用法，すなわち空間詞としての on の用法についてである。抽出された中核的意味は，必要十分条件として定義するものであり，古典的理論（classical theory）の考え方に基づくものである。

二つ目は，カテゴリーのプロトタイプ（Rosch（1973），Rosch and Mervis（1975））と家族的類似性概念（family resemblance）（Rosch and Mervis（1975），Wittgenstein（1958））を適用した複数意味説（Lexical network analyses とも呼ばれる（Sandra and Rice, 1995）である。Lakoff（1987），Brugman（1988），Taylor（2002）などに代表される。このアプローチから行った英語空間詞 over の分析がよく知られている。この分析によると，空間詞 over の多義性には，その語のさまざまな多義の意味に共通する意味はない。成分分析，単一意味説が主張するような，単一の共通する意味はないとする。それら多義の意味は独立した意味を持ち，そして互いに関係を持ちながら家族的類似構造を持つと主張する。家族的類似構造を持つとは，家族のメンバーは互いに類似しているが，すべてのメンバーに共通する特徴はない。だが，家族としての特徴を持ち，他の家族とは区別される。そのように，多義語の多義は互いに何らかの意味関係（比喩的拡張など）を持ちながら類似しているが，すべての多義に共通する意味はない。しかもその多義語は一つの語としての独立性を持ち，他の語とは区別される。

三つ目は，上記二つの中間的立場と言える。上記両者に対しする批判から生まれている（Hawkins（1984），Ruhl（1989），Evans（2009），田中（1996））。Bennett（1975）などの成分分析によって抽出された意味は，対象となる語の意味としては不十分過ぎる。またその語の持つニュアンスなどは扱えないという問題がある。また，複数意味説に対しては，成分分析によって抽出された共通意味とは異なるが，多義語にもその語のさまざまな多義の用法に共通する意味が存在すると捉える。この共通する意味とは，文脈を捨象して捉えた抽象的な意味である。プロトタイプとは異なる。プロトタイプは，具体的な典型例である。この共通する意味とは，その語の基本義と言い換えてよい。その基本義を図式化して示しているのが，コア図式論である（田中，1996）。

本論文では，第三番目の多義の捉え方に基づいて調査し，考察を進めていく。Bennett（1975）のようなアプローチは，単純化し過ぎているため，本論で扱う前置詞のさまざまな意味の分析・考察には不向きと考える。第二の複数意味論は，参考にするところは多々あるが，今回扱う英語前置詞 on にはほとんどの用法に共通する基本義があると考えるため，第三の立場をとる。「ほとんど」とは，「すべて」に共通する意味があるとは期待していないからである。また，「すべて」に共通する意味がなくても問題はない。大多数の用法に共通する意味があれば，十

分あり，その他は例外的なものとして捉えておけばよいと考える。語の意味は，自然現象ではなく社会現象の一部であり，「ほとんど」が説明できれば十分と考える。

2.2　On の基本義

前置詞 on の基本義に関して，近年の研究成果と，最近の英語辞書の扱いを検討して，次のように定義する。

On の基本義：『接触』「支持」「プロトタイプ（～の上に（on top of））」

On のコア図式（基本義を図式として捉えたもの）としては，次の図を提示しておく。

On の基本義として，「接触（contact）」の意味が主要な先行研究，またそれらに基づいたと思われる参考書，辞書等において多く記載されている。Herskovits（1986，1988）では，on の理想的意味（ideal meaning）として「隣接性（contiguity）」と「支持（support）」を提示している。「隣接性」は「接触」と考えてよいだろう。さらに，Lee（2001）及び Evans（2009），そして田中（1996）においても，「接触」が on の基本義とされている。辞書・参考書で基本義を「接触」として明示的に挙げているのが，辞書では『E ゲイト』，『ウィズダム』，『プログレッシブ』，参考書に当たるものとしては『表現英文法』，『「なぜ」がわかる』などである。明示的ではないが，語義として「接触」を最初に置いているものに次の辞書がある：『ジーニアス』，『リーダーズ』，『ランダムハウス』，COBUILD 8，OALD 9，LDOCE 5。

上記で Herskovits（1986，1988）は on の理想的意味（ideal meaning）として「隣接性（contiguity）」と「支持（support）」を提示していることに触れたが，この後者の「支持」は「接触」と一対となって on の基本義を構成していると考えられる。Lee（2001），Evans（2009）でも「接触」と同時に「支持」も基本義の一つとして扱っている。なお，「接触」と「支持」

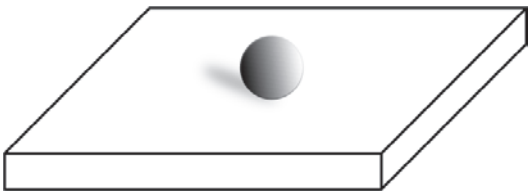

図 1　On の基本義のコア図式

は一対となって重要ではあるが，前者の方がより重要になっていると考えられる。そのため，その違いを示すため前者の表記を二重鉤括弧『』を用いて表した。

On の抽象的な基本義は『接触』であるが，それにはプロトタイプがあり，「～の上に」という意味である。このことは，Lee（2001）なども暗に指摘しており，on の用例で native にまず思い浮かぶのは the pen *on* the desk のような例であるとしている。そしてこう説明を付け加えている：

> “two entities are in physical contact with each other, with one positioned *above* the other and supported by it.”（Lee, 2001:21）（強調は筆者による）

また，『表現英文法』においても，on の典型例として The cat is *on* the sofa. を挙げ，水平面への接触（つまり，「～の上」）を表すと説明されている。なお，Lee（2001）のこの基本義の説明の箇所に“support（ed）”の語が示されている。

On のコア図式としては，『E ゲイト英和辞典』，『表現英文法』，『「なぜ」がわかる』にそれぞれ次のような図式が掲載されている。

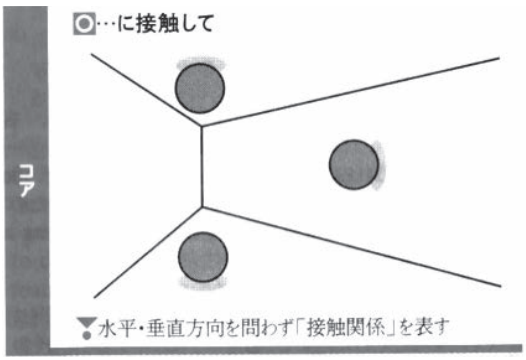

図 2　『E ゲイト英和辞典』掲載の on のコア図式

図 3　『表現英文法』掲載の on のコア図式（p. 445）

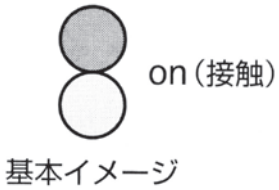

図 4　『「なぜ」がわかる』掲載の on のコア図式（p. 81）

筆者としては，on のプロトタイプ用法を重視して先の図式（図 1）を提示したが，どの図式がより妥当であるかはここでは議論しないこととする。

3. On の基本義の具体的用法おける意味展開，意味拡張

以下では，on の用例，用法を基本義を忠実に反映した，あるいはそれに比較的近い（1）具体的「基本」用法，基本用法との類似性を明らかに保ちながらもそこからの拡張を示す（2）具体的「中間的拡張」用法，そして基本義とのわずかな関係しか持たない（3）具体的「周辺的拡張」用法に分類する。

3.1　On の具体的「基本」用法

On の基本義：『接触』「支持」「プロトタイプ［～の上に］」

『接触』「支持」だけでなく，「～の上に」の意味を持つ用法が典型例，つまりプロトタイプ用法である（例（1））。

（1）the apple *on* the table

プロトタイプ用法に対し「ノン・プロトタイプ」用法は，「～の上に」の意味を持たない。例文（2），（3）がその用例である。

（2）the poster *on* the wall
（3）the fly *on* the ceiling

Evans（2009）は，次の（4）の例を挙げて，on の基本義として「支持」の必須性を論じている。

（4）the apple *on* the wall

apple が壁に接していても，誰かがそれを支えている場合，（4）の表現は正しくない。（4）の表現が適切であるためには，apple が壁に接着剤などで固定されている必要がある。確かに，

上記の（2），（3）の例でも同様，固定（支持）されている。

接触面についてである。（1）～（3）の例からは，トラジェクタ（TR）・ランドマーク（LM）の前置詞の目的語に当たる LM は，どれも表面が対象となっている。だが後で触れるように，接触箇所は面，線，点のいずれでもよい。

3.2　On の具体的「中間的拡張」用法

ノン・プロトタイプの用例を含めてみても，基本用法に属する用例パターンは多くない。圧倒的に多いのは，「中間的拡張」用法に属するものである。

A.［乗り物に］乗って移動：『接触』「支持」「プロトタイプ（上に）」「平面（表面）」○／×

（5）the people *on* the bus

（5）の例は，単に人の位置を示しているわけではない。乗り物で移動中のことを表す。この場合，「乗って移動」の「乗って」の意味によって on が選択されると思われる。だが，「乗って移動」という一続きの語用論的なシナリオが，この用法において「移動」という意味要素を必須のものとして含めたと推測される。この用法の場合，bus の他に train，ship，plane などが対象となる。つまり，乗る平面を持つ大きな乗り物に用いられる。Taxi などは，乗り物ではあるが，狭い空間に「乗り込む」というイメージが強いため，容器のコア図式を基本義に持つ in が用いられる。

この用法の on はプロトタイプ的（「上に」）である。したがって，「表面」は「平面」と表記した。ところで，『接触』「支持」に加えて，プロトタイプ「上に」があるため，この用法は「中間的拡張」用法の中でも最も基本的用法に近いのであろうか，さらに分析考察を要するかもしれない。

ところで，「大きな乗り物」「平面」が大事な要素かと思うと，類似しているがそうでもない用例も出てくる。

（6）get on a bike
（7）get on a horse
（8）on the skateboard

(6)，(7) の bike，horse 乗り物としては小さい，しかも「平面」はない。(8) の skateboard は，「平面」があるといっても，明らかに小さい。また，skateboard に乗る際にその「平面」が大きな意味を持つとは思われない。

したがって，分類 A は，意味要素「平面」がある場合と，ない場合に分けられる。意味要素「表面」に限らず，ある意味要素の有無を「○／×」の記号で表した。また，ある意味要素が非典型的な形で現れる場合は，「△」で表記した。

「平面」の有る無しの違いから，上記の下位分類を明示することもできる。

A.［乗り物に］乗って移動：『接触』「支持」「平面」○

a)「平面」○

b)「平面」×

このように下位分類を明示することは可能であるが，分類のための分類に陥ってしまうこともあるので，注意が必要である。

B. 付着して，身につけて：『接触○／△』「支持△」「表面○／△」

この用法には，on の目的語である LM が人（あるいはその部分）かモノかにより，大きく 2 つの下位分類が考えられる。

(a) 付着して（モノに対して）：『接触○／△』「支持△」「表面○／△」

(b) 身につけて（人に対して）：『接触』「支持」「表面」

下位分類（a）は，さらに次の 3 つの種類に分けられる。

i）TR と LM は別物であり，TR に若干の厚さ，サイズが認められる場合

ii）TR と LM は別物であるが，TR に厚さがないと言っていい場合

iii）TR が LM の一部になっている場合，×表面

下位分類（b）は，さらに次の 3 つの種類に分けられる。

i）TR が外部から見える場合

ii）TR が外部から見えない場合

(a) 付着して：『接触』「支持△」「表面」

（i）TR と LM は別物であり，TR に若干の厚さ，サイズが認められる場合：『接触』「支持△」「表面」

（９）Pull the knob *on* the door.
（10）You've got mud *on* your shoes.

用例（10）における「支持」の意味要素には違和感がある。しかし，TR（knob，mud）はその位置を維持するためには，それを助けてくれるものが必要である。接触，支持を兼ね合わせた「接着」という意味要素がいいかもしれない。もっとも，プロトタイプ的状況（「上に」）（例（1）the apple *on* the table）では，接着ではなく，『接触』「支持」である。

（ii）TR と LM は別物であるが，実質的には TR に厚さがない場合：『接触』「支持△」「表面」

（11）the writing *on* the paper
（12）a tattoo *on* the shoulder
（13）the shadow *on* the wall

（11）～（13）の３例においても，「支持」の意味要素には違和感が感じられる。やはり「接着」の方がよいように思われる。

（iii）TR が LM の一部になっている場合：『接触△』「支持△」「表面△」

（14）the wrinkles *on* the face
（15）the carving *on* the stone
（16）have a smile *on* one's face

（iii）の例は，TR は LM の一部となっている。したがって，物理的（客観的）には，『接触』「支持」「表面」の意味要素はここには存在しない。だが，認知的にはあたかもここでの TR と LM の関係が on の基本義（及びその基本コア図式）に当てはまっているかのように受け取られる。

（b）身につけて：『接触』「支持」「表面」

（17）The dress looks good *on* you.
（18）a ring *on* one's middle finger

（19）I got some money *on* me.
（20）Have you got a lighter *on* you?

（17），（18）では，TR（the dress, a ring）は外から見える。それに対し，（19），（20）では，外から見えない。見えない後者の例は，基本義からより遠ざかっていると言える。

C. ぶら下がって：『接触』「支持△」「点」
（21）the apple *on* the branch
（22）the medal *on* a chain
（23）the fish *on* the hook
（24）The dog is *on* the leash.
（25）The living room has three lamps *on* the ceiling.

接触の仕方が「ぶら下がる」「つり下がる」「ひっかかる」というようにいささか特殊である。その分，基本義との関係が低くなると思われる。接触箇所が「点」であること自体は，基本義との関係を低くするわけではない。このことは，3.1 ですでに触れた。「点」は，「ぶら下がる」などの接触の仕方から生じているだけである。（25）の場合でも，ceiling 自体は広さを持つが，接触の仕方は「つり下がる」なので，ランプ全体が天井についている（図 5）わけでなく，ある一点（図 6）で接触しているのである。ここの項目の他の例（21）～（24）と変わることはない。

図 5：ランプが天井についている

図 6：ランプが天井からつり下がっている

D. 面して：『接触』「支持×」「線・点」

（26）The town is right *on* the border.
（27）The sun is *on* the horizon.
（28）The shop is *on* your right.
（29）a store *on* Fifth Avenue
（30）a hotel *on* the coast
（31）the house *on* the lake

「面して」という表現を与えているが，実際は「線・点」（図 7 参照）である。

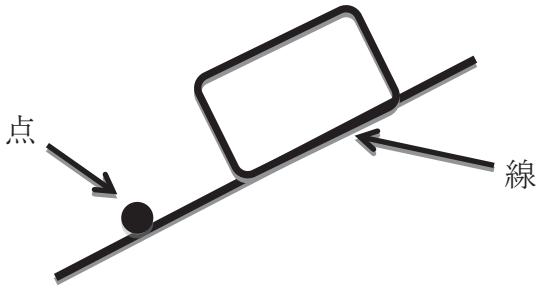

図 7：「面して」の場合の接触の仕方

このタイプの用法に極めて重要な特徴は，（一見すると）「支持」の要素がないということである。単に隣接してあることを示しているにすぎない。「支持」の意味要素は，2.2 及び 3.1 で示した基本義の準必須項目と捉えられたにも関わらずである。

「支持」の要素が欠如している理由について，筆者としては次のように推測する。この分類での用法では，地平での指示が前提となっている。つまり，垂直のベクトルは，on の認知的関係を見るときに考慮外とされる。「支持」の要素は不要となり，水平面だけで対象物（TR と LM）間の関係を見ることになる。そこでは，「隣接性」すなわち『接触』だけが on の使用の適切性を示すことになる。

上記の（4）the apple *on* the wall では，垂直方向の指示が大きな問題となる。リンゴが壁に隣接していても，人がそれを支えて入れば，後者の方に大きな注意がいく。したがって，その状況を指して the apple *on* the wall とは言えない。これが，例文（4）の用法と用法 D の違い

であろう。

E.［本体の部分で本体を］支えて：『接触△』「支持」「表面△」「プロトタイプ（上に）」

（32）*on* one's feet/knees/legs/back
（33）*on* tiptoe
（34）o*n* all fours
（35）sleep *on* one's back/stomach
（36）stand *on* one's hands
（37）fall *on* one's knees

この分類の用法では，例えば体の一部（足など）で体を支える表現になっている。LM（on の目的語）が TR の一部になっている（feet は体全体の一部）。接触のあり方が特異である。なお，先に触れた B. 付着の（a）iii）の場合，TR が LM の一部になっている：（14）the wrinkles *on* the face。ちょうど反対になっている。

『接触』が on の基本義の第一であるとすると，この接触の特異性は当然意味拡張になる。本体の主要部分がその本体の別の部分に接しているというのは，客観的には不合理である。客観的には接触を示すものではないが，認知的には接触の状況を構成していると見てとることができる。さらにこの認知的接触の把握に，「支持」「プロトタイプ（上に）」が加わるので，on の具体的中間用法として分類するのは十分妥当と思われる。

実際（36）のような場合，両手は確かに体の一部とは言え，認知的に体本体とは別の対象として捉えてもまったく自然に思われる。

F. ～の表面に向けて：『接触』，「支持△」

（38）knock *on* the door
（39）She kissed her baby *on* the cheek.
（40）He was hit *on* the head.

一見すると「支持」の意味要素がない。この点では，「D 面して」と同じである。だが，使用される状況はまったく違う。この on フレーズに大きく関わって使用される動詞（の意味）

によりダイナミックな動きと接触が表わされていると考えられる。そしてこうした動詞の行為（knock，kiss，hit）を on の目的語である LM（door，cheek，head）が受け止めている。つまり，支持していると考えられる。このような解釈が成り立つ限り，中間的用法といえるであろう。

G. 表面を連想させる場所：『接触』，「支持」，「プロトタイプ（上に）」「平面（表面）」

（41）the cafeteria *on* the campus
（42）the players *on* the football field
（43）work *on* a farm
（44）live *on* an island
（45）The highest mountain *on* the continent is Mont Blanc.

「表面を連想させる場所」とは，『ウィズダム』による説明である。的を得た説と思われる。調査した中では唯一『ウィズダム』だけであった。日本人である筆者としては，（41）～（45）の中で（44）*on* an island のみさほど違和感なく理解できる。（41）*on* the campus は，筆者のアメリカの大学留学経験の中で「慣れ」の結果として，やはり違和感がなくなっている。

表面を連想させれば何でも on～と表現できるわけではない。そういう意味では慣用的である。だが，例えば *on* the campus という表現で，on が使用される動機，理由が納得いくものであれば，慣用表現的ではあるが，on の「中間的拡張」用法と分類しておくことができると考える。確かに，上記例文（41）～（45）はどれも「～の上に／で（「表面」）」で解釈することできる。On が使用されれば，on の基本義に合わせた解釈を行うことがそれほど無理なくできる。

3.3　On の具体的「周辺的拡張」用法

調査してみると，意外にも具体的「周辺的拡張」用法は多くないように思われた。基本義から認知的にあまりに遠く離れてしまうような言語使用をすることあまりないのであろう。少なとも on についてはそれが当てはまるようである。

次の用例は，具体的「周辺的拡張」用法に属するのではないかと思われる。

（46）write a song *on* the piano
（47）play the tune *on* the violin

（48）play a tune *on* the guitar

他の上記の「中間的拡張」用法とは違い，一見するとなぜ on なのかすぐには理解できない。(46) の「ピアノを使って」というのであれば，手段を表す他の前置詞の方がよさそうに思える。(47)，(48) についてほぼ同様に感じる。

あえて on の基本義との関係を推測してみる。英語ネイティブには，楽器に「点」的に接着して，曲を書いたり，引いたりする感覚があるのかもしれない。それがこの用法に投影されているのかもしれない。楽器に覆いかぶさる感じあれば over イメージになるので，やはり「点」的なのであろうと思われる。

4. まとめとディスカッション

On の具体的用法における意味拡張をまとめてみる。

On の基本義：『接触』「支持」「プロトタイプ（～の上に）」

具体的「中間的拡張」用法：

A.［乗り物に］乗って移動：『接触』「支持」「プロトタイプ（上に）」「平面（表面）」○／×

B. 付着して，身につけて：『接触○／△』「支持△」「表面○／△」

（a）付着して（モノに対して）：『接触○／△』「支持△」「表面○／△」

ｉ）TR と LM は別物であり，TR に若干の厚さ，サイズが認められる場合

ii）TR と LM は別物であるが，TR に厚さがないと言っていい場合

iii）TR が LM の一部になっている場合，×表面

（b）身につけて（人に対して）：『接触』「支持」「表面」

ｉ）TR が外部から見える場合

ii）TR が外部から見えない場合

C. ぶら下がって：『接触』「支持△」「点」

D. 面して：『接触』「支持×」「線・点」

E.［本体の部分で本体を］支えて：『接触△』「支持」「表面△」「プロトタイプ（上に）」

F. ～の表面に向けて：『接触』，「支持△」

G. 表面を連想させる場所：『接触』，「支持」，「プロトタイプ（上に）」「平面（表面）」

具体的「周辺的拡張」用法：

（46）write a song *on* the piano のタイプ

ほとんどが基本義を反映した意味拡張となっている。もちろん，（32）*on* one's feet などのように本来は同じものでありながら，あたかも別物として捉える認知的な解釈を行わなければいけない。その他さまざまな「あたかも～」の解釈を加えることになるが，かなり明瞭に基本義の反映をみることができる。したがって，ほとんど意味拡張の用法は「中間的拡張」に分類される。

このことは，on の空間詞としての使用においては，複数意味説が主張するような家族的類似性の多義の意味構造が見られないことを示している。わずかな周辺的拡張の例を除いては，すべて基本義の反映があるからである。

このような基本義の認知的意味拡張による多義の構造は，前置詞 over の多義（田中，1999），前置詞 in の具体的用法における多義（田中，2016）の意味構造にも見られた。同じようなことが，他の前置詞にも当てはまるのかは，今後の課題である。なお，over の多義の意味構造のあり方は極めてすっきりしている。それに反して，本調査で見た on の多義の構造，意味拡張のあり方はずっと複雑である。また，田中（2016）で扱った in の「抽象的」用法における意味拡張は，基本義とのつながりが極めて不透明であった。抽象的用法における on については今回調査しなかったので，やはり今後の課題である。

基本義の 3 つの意味要素（『接触』「支持」「プロトタイプ（～の上に）」）は，それぞれ独立したものではない。2.2 On の基本義のところでも述べたが，一対になっていて，独立変数ではない。支持によって接触が保たれている。そして，「プロトタイプ（～の上に）」の用法は，この一対となった『接触』「支持」の要素を持った on の典型的使用である。

On の具体的「中間的拡張」用法には，かなりの数の用法タイプがあったが，それらを拡張程度の観点から明瞭な順位をつけるのは困難である。すでに述べたように，on の多義の構造，意味拡張のあり方はかなり複雑である。例えば，「乗り物」に使う on の用法は，中間的用法の中で最も基本義に近いか，である。中間的用法分類 A を構成する意味要素を見ると，確かに基本義に近い。だが，具体的に用例を見ると，他の用法に比べて明らかに基本義に近いとは言い難い。(5) the people *on* the bus の例では，バスは大きくて容器性が非常に高い。したがって，in the bus との区別がつきにくい。その区別は，バスに乗って移動しているかどうかという背景的，語用論的な違いである。車庫にあるバスに点検のため人が中に入っている場合は，客観的にはまったく同じ空間的関係にあっても，the people *in* the bus で表現されるであろう。

もう一つ，「中間的拡張」用法の中で下位分類を持つ用法 B（「付着して」など）ついてもこのことが言える。B の下位分類を再掲する：

（a）付着して（モノに対して）：『接触○／△』「支持△」「表面○／△」

ｉ）TR と LM は別物であり，TR に若干の厚さ，サイズが認められる場合

ii）TR と LM は別物であるが，TR に厚さがないと言っていい場合

iii）TR が LM の一部になっている場合，×表面

（b）身につけて（人に対して）：『接触』「支持」「表面」

ｉ）TR が外部から見える場合

ii）TR が外部から見えない場合

5 つ下位分類ができているために，全体としてどれほど基本義に近いか判断するのが難しくなっている。例えば，a）i）は b）ii）より基本義に近いかもしれないが，b）i）は a）iii）より基本義に近いかもしれない。

後　注

1　前置詞 over の多義性については，田中（1999）で論じた。

参考文献

Bennett, David C. 1975, *Spatial and Temporal Uses of English Prepositions*. London: Longman

Brugman, C. M. 1988, *The Story of over: Polysemy, Semantics, and the Structure of the Lexicon*. New York: Garland.

Evans, Vyvyan. 2009, *How Words Mean: Lexical Concepts, Cognitive Models, and Meaning Construction*. New York: Oxford University Press.

Goddard, Cliff. 2002, "*On* and *on*: Verbal explications for a polysemic network" *Cognitive Linguistics*, 13, pp. 277–294.

Hawkins, B. W. 1984, The semantics of English spatial prepositions. Unpublished Ph.D. Dissertation, University of California, San Diego.

Herskovits, Annette.1986, "Spatial expressions and the plasticity of meaning," *Topics in Cognitive Linguistics*, Amsterdam: John Benjamins, pp. 271–297.

Herskovits, Annette.1988, *Language and Spatial Cognition: An Interdisciplinary Study of the Prepositions in English*, Cambridge: Cambridge University Press.

Lakoff, George. 1987, *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.

Lee, David. 2001, *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Victoria, Australia: Oxford University Press.

中川右也，土屋知洋，2011，『「なぜ」がわかる動詞＋前置詞』ベレ出版
Rosch, Eleanor.H. 1973, “Natural categories,” *Cognitive Psychology 4*, pp. 328–350.
Rosch, Eleanor. H., & Mervis, C. B. 1975, Family resemblance studies in the internal structure of categories. *Cognitive Psychology, 7*, pp. 573–605.
Ruhl, Charles. 1989, *On Monosemy: A Study in Linguistic Semantics*. New York: State University of New York Press.
Sandra, Dominiek, & Rice, Sally. 1995, “Network analyses of prepositional meaning: Mirroring whose mind–the linguist’s or the language user’s?” *Cognitive Linguistics, 6*（*1*）,pp. 89–130.
田中茂範，1996，「前置詞における多義の多義性：複数図式論 vs. コア図式論」ふじさわ言語研究　3
田中茂範，2013，『わかるから使えるへ　表現英文法』コスモピア
田中　実，1999，“Over is revisited: The single image schema of over,” 川村短期大学研究紀要 19 号，pp. 9–28.
田中　実，2016「In の基本義の拡張の程度―抽象的拡張的意味の不透明性―」川村学園女子大学研究紀要第 27 巻第 2 号，pp. 139–152.
Taylor, John R. 2002, *Linguistic Categorization*. 3rd Edition. New York: Oxford University Press
Wittgenstein, Ludwig. 1958, *Philosophical investigations*（G. E. M. Anscombe, Trans.）. Oxford, U.K.: Blackwell.

参考文献：辞書

『E ゲイト英和辞典』，ベネッセ・コーポレーション，2003.
『ウィズダム英和辞典　第 3 版』，三省堂，2012.
『ジーニアス英和辞典　第 5 版』，大修館，2014.
『ジーニアス英和大辞典』，大修館，2001.
『プログレッシブ英和中辞典　第 5 版』，小学館，2012.
『リーダーズ英和辞典　第 3 版』，研究社，2012.
『小学館ランダムハウス英和大辞典　第 2 版』，小学館，1993.
Collins Cobuild Advanced Learner's Dictionary, 8th Edition. HarperCollins Publishers UK, 2014.
Longman Dictionary of Contemporary English, 5th Edition. Pearson Japan, 2009.
Oxford Advanced Learner’s Dictionary of Current English, 9th Edition, Oxford University Press, 2015.